

【雪像造りの大黒柱】

井手久

Ide hisashi

百九十万人が住む街へと成長した札幌。先人が築いた礎の上、皆それぞれに輝きを放ちながら、この街で暮らしています。この連載では、そんな百九十万人の一人に焦点を当て、その輝きの源に迫ります。



「この冬は雪がなかなか降らないね」。心配そうに空を見上げて語るのは、四十三年間、さっぽろ雪まつりの大雪像制作を支える、井手久さん。

雪像との出会いは、自衛隊に入隊し、俱知安に赴任したとき。町の行事で約二層の雪像を造った。「九州育ちで雪も寒さも苦手だから、辛かったなあ」と当時を振り返る。

その後、真駒内駐屯地へ。昭和四十三年に大通会場の大雪像造りに初めて参加した。当時は、だるまストーブをたいたテントの中で約一カ月間、寝泊まりして作業したという。

現場で習得した技術と、数十人の隊員をまとめる力量を買われ、四十六年に制作の長に。その後は、日本の名城など、見物客を魅了する数々の大雪像制作の指揮を執った。

「一番苦労したのは金閣寺。振り返った屋根には、四隅にまで骨組みを入れて安定させたんだよ。熊本城のときは、雨で庇が崩れそうになってね、ジャッキで持ち上げて直したけど、新聞では落城なんて報道されて」。

懐かしそうに昔の写真を眺めて語る様子からは、一つ一つの雪像への深い愛着が感じられる。

平成七年、自衛隊を退官。誰よりもその苛酷さを知るからこそ、雪像造りからの引退も決めていた。だが、周囲がそれを許さなかった。十三年、市の大雪像制作の隊長をしてほしいと頼み込まれた。「何度も断ったが、十二月に模型もできていないと知り、心配で引き受けちゃったんだ」。

現場では、朝一番に来てストーブをたき、笑顔で市民ボランティアを迎える。積極的に仲間話に話し掛けて回り、帰るのは最後。「自衛隊時代と違って、人も技術も足りないから本当に大変。でも、楽しくやれば、みんなついてきてくれるからね」。

見物客にも自分から声を掛け、一緒に写真に納まる。お客さんが喜ぶ顔が何よりの励みだ。「雪まつりは世界に誇るイベント。市民の力で立派な雪像を造り、ずっと続けていかねばならない」。穏やかで真つすぐな瞳から、雪像への熱い思いと強い責任感が伝わってきた。冬本番、今年も井手さんは奮闘中だ。

井手久

佐賀県出身の68歳。自衛隊時代に、金閣寺や姫路城、ソウルオリンピックスタジアムなどさっぽろ雪まつり史上に残る大雪像を制作。9年前に、市の大雪像制作団の隊長に就任。今年も大通公園5丁目、市民ボランティアたちと一緒に大雪像を造る。



第61回さっぽろ雪まつり

イベントの目玉は大雪像。毎年国内外から約200万人もの観光客が訪れます(詳細は22頁)。

■期間/2月5日(金)~11日(祝) ■会場/大通会場、すすきの会場、つどいむ会場

■詳細/雪まつり実行委員会(観光企画課内) ☎211-2376 ■ホームページ/www.snowfes.com